

日本癌学会 JCA-Mauvernay Award・井上學術賞 「研究での喜びについて」

高次生命科学専攻 システム機能学分野

井垣達史

この度、石川冬木先生のご推薦により日本癌学会 JCA-Mauvernay Award を、西田栄介先生のご推薦により井上學術賞を受賞させていただきましたこと、学会や財団の皆様、関係の先生方、ご推薦いただいた先生方、いつも多大なるサポートをいただいている生命科学研究科の皆様、そして何より日々全力で研究を頑張ってくれているラボメンバーの皆さんにこの場を借りて感謝申し上げます。

研究をしていて大きな喜びを感じる時が3つあるといつも感じています。1つは新たなことを発見した時。最初に感じたのは学部4年の時で、核酸合成の材料となる細胞内 dNTP プールを HPLC で解析していた際にそれまで見たこともない未知の小さなピークを発見し、その晩は眠れなくなるくらい興奮しました。30 台の半ばに Yale 大学でポスドクをしていた際、TNF をノックアウトしたショウジョウバエ組織では細胞競合が起こらないことを顕微鏡下で見つけ、心臓が飛び出るほど感動しました。その時見た複眼原基の像は今でも目に焼き付いています。研究室を主宰するようになってからは現場での第一発見者にはなれなくなってしまいましたが、それでもラボメンバー達が持ってきてくれる一連のデータから新たな法則を発見したり、何だかよくわからないけど異常に面白そうなデータを見たりした時、同じような脳幹が震えるような感動を味わいます。これらの喜びは研究者になってよかったというよりは、研究が楽しくてたまらない、研究者をやっている理由のようなものだと思います。

2つ目は論文がアクセプトされた時。どんな偉大な発見も論文として公表されなければ成果として認められないわけですが、そのプロセスは新事実の発見とは方向性が全く異なり、時に辛く険しい戦いになります。これまでに一番忘れられないのは、独立して最初の論文(当時ポスドクだった大澤志津江さんの論文)がアクセプトされた時のこと。4年半のテニュアトラック期間のうちすでに3年以上が経過して焦っていましたが、妥協せず時間をかけて完全なリビジョンをして Developmental Cell 誌に再投稿しました。戦いを終えたある日の夜明け前、大学の官舎のパソコン上で Dev Cell の web サイトの表示が「Accept」に変わったのを見届けた瞬間に布団に倒れこみました。その時見た Accept の文字のフォントは今でも目に焼き付いています。論文のアクセプトは格別の喜びとともにこれでようやく成果を世界に発信できるという深い安堵を覚えるもので、研究者であることの幸せを感じるのとは少し違うと感じています。

3つ目は研究の面白さや喜びを世界中の仲間やライバル達と共有する時のこと。互いの研究を尊重・尊敬し合い、心から議論し、サイエンスを楽しむ時、研究者であることの幸せを最も強く感じます。尊敬する偉大な研究者が国際会議のトークで自分達の研究に触れてくれたり、自分達が論文に書いたフレーズを引用してくれたりした時、少なくとも自分の存在がこの偉大な研究者に何かの影響を与えたんだと思うとこの上ない喜びを感じます。認められた喜びというよりは、サイエンスに貢献できたという喜びです。同じ研究分野に限らず、もちろんラボメンバーも含めて、サイエンスを通じてできたすべての人とのつながりが何よりも大切なものだと感じています。つまり研究者であることの幸せは、日本中、世界中の人たちと常につながっていることだと思います。研究はやはり人がやっているものだからだと思います。こんなに楽しくて贅沢で幸せな職業はなかなかないだろうといつも思っています。



井上學術賞授賞式の懇親会にて、井上科学振興財団理事の岡田清孝先生(中央)、井上研究奨励賞を受賞された上村研卒業生の新田昌輝さん(右)とともに。